

「2040年に量産可能なプライベート向けエアモビリティのデザインの研究」

12107009 木上 凌輔

研究目的

『プライベートでの使用を主な目的とする独創的なエアモビリティの追求』

エアモビリティ『空飛ぶクルマ』の現状としては2020年代での実用化を目処にスタートアップ企業を初め開発が激化中である。現在開発されているエアモビリティの多くはeVtol（電動垂直離着陸機）が主流であり、公共交通機関としての役割を担うことが期待されている。国内においては今年行われる大阪万博でデモフライトが予定されており、法改正を含めて国を挙げて実用化を目指している。それらを踏まえて私は今後エアモビリティを公共交通機関のみならず、プライベート用途で使いたいという需要が高まると仮定し、それに相応しいスタイリングを研究し、本制作で提案を行う。

既存モビリティの調査



Sky-Drive

スマホで予約し、上空タクシーのような感覚で利用できる eVtol
最大4名乗車が可能（内一人は操縦士）※今後の開発で完全自動運転に移行予定
スズキが製造を担当



「X-Turismo」 A.L.I TECHNOLOGY

「空を駆けるホバーバイク」として開発された eVtol
既に量産化に入っており、第一号車が納車済み
現状では法規制によって限られた場所のみの走行に限られる

調査から得たアウトプット案

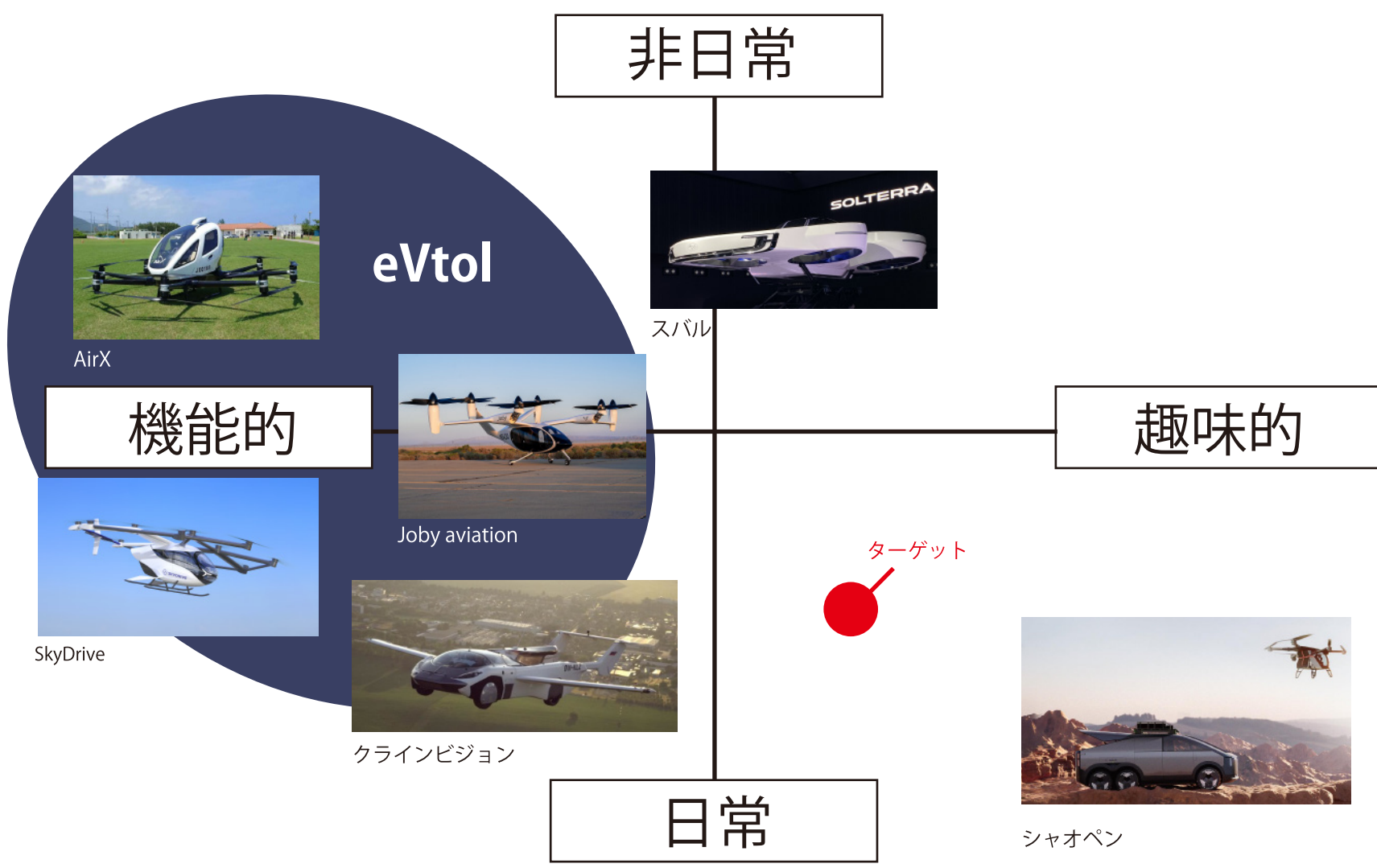
1. 「ユーザーの趣味趣向を満たすスタイリング」

今回は趣味趣向を求めるユーザーをターゲットにする為、ユーザーに長く愛されるようなデザインの提案を行う
アーティスティックな表現を用いて見る人も乗る人も感動させるデザインを目指す。

2. 「既存 eVtol よりも実用的で日常的に使いやすい配慮」

現在開発されている eVtol の多くは多人乗車を前提としている為にボディサイズが大きく、プライベートに環境を置き換えた際に支障をきたすと思われる。乗車人数を2名までに限定した上でプロペラの配置も見直しながらボディサイズのダウンサイジングを目指す。

ポジショニングマップの作成



スタイリングの方向性

「既存の eVtol とクルマとも異なる新たなカタチの模索」

Public Air Mobility (evtol)
「飛行体験を可能にする機能的なカタチ」



Personal Car

「車種毎に異なる個性を持ったカタチ」

New Personal Air Mobility

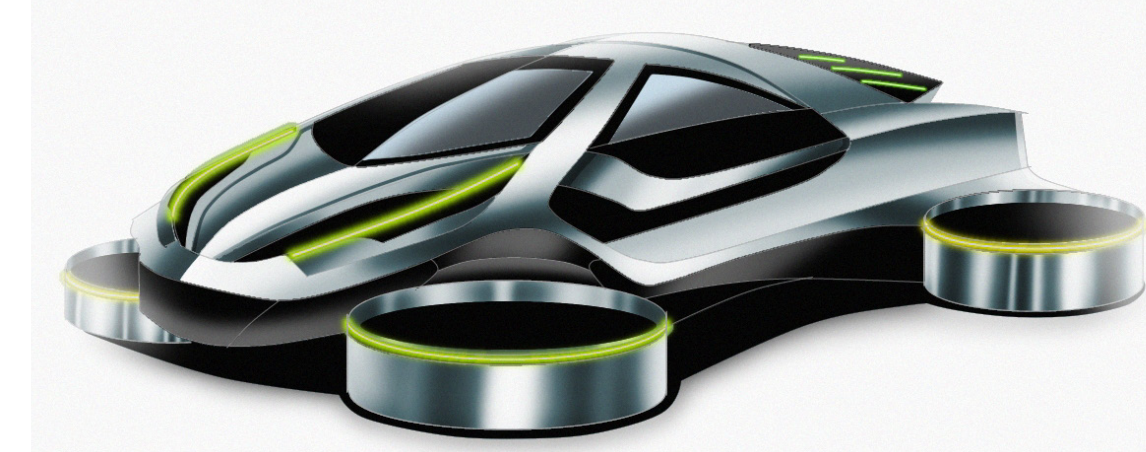
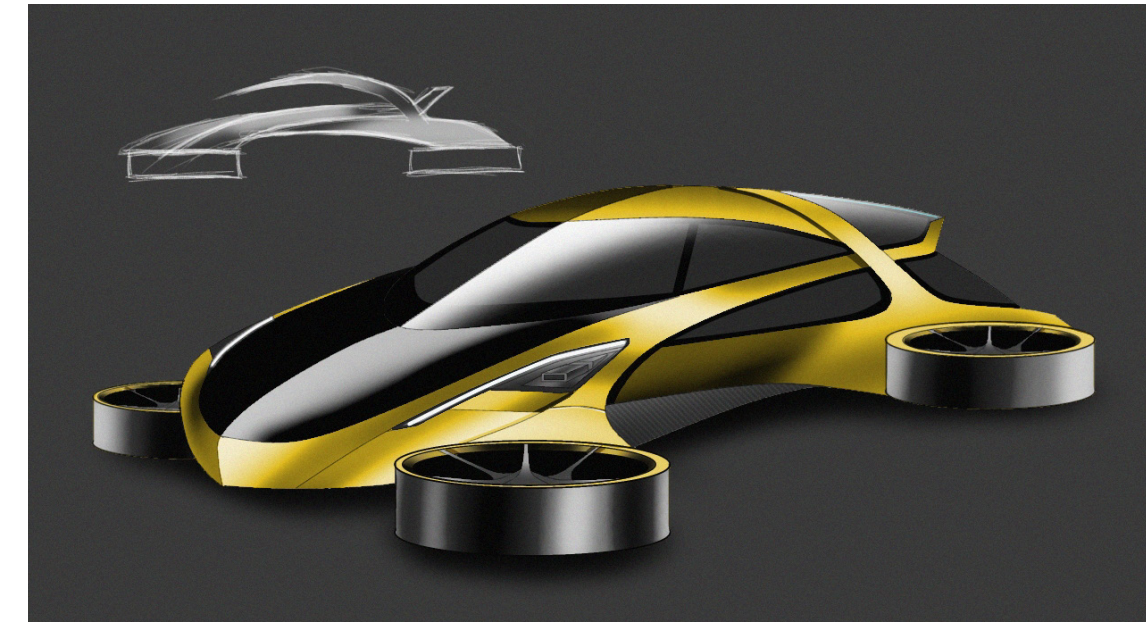


「今まで見たことの無いような新規性のあるカタチ」

初期アイデアスケッチ



中間スケッチ / 立体検討



最終レンダリング

